

は263.7kgとなった。

上イモの階級比率は、慣行苗でS・2Sサイズの小イモの比率が33.8%と高くなったが、セル苗ではL・Mサイズ以上の階級比率が92～96%と高くなる傾向となった。中でも15cmはL・Mサイズが52%となり揃いが良かった。

以上のことから、育苗日数は7日から14日程度、ツル先の挿し方は培土に節が埋まるようにすること、培土はオアシスブロックを用いること、定植間隔は15cmが収量・品質・揃いの点で適当と考えられる。(表3、4)

3 まとめと今後の課題

セル苗については葉菜類や果菜類及び花卉などでは、実用化され普及段階だが、サツマイモのセル成型育苗技術は、まだ確立されていない。

セル苗の活着率は、現段階では慣行ツルの手植えに比べて劣っており、活着率を向上さ

せるための灌水量や、セル苗の発根程度を斉一化する技術に検討を要し、定植機についてもサツマイモの栽培条件に合うように改良することが必要である。

また、セル成型苗の機械定植には、大量のツル先が必要となるため、ツル先を一時に多く採るためのツルの栽培管理技術や均一なセル苗の大量育苗技術の開発が必要である。

さらに、サツマイモ栽培を苗作りの段階から機械化に適応するように体系化しようとする場合、栽植本数の増加が必要となってくるが、この場合、収穫前のツルまくり作業の増大を解消するために、ツルまくり機械の開発も必要となってくる。

本試験は着手したばかりであり、今後は数々の技術解決が必要と考えているが、サツマイモもセル成型苗にすることにより全自動定植が可能になることが示唆された。

第4回アジア馬鈴薯研究会に参加して

アジアの馬鈴薯関係者が集まり「いも」について語ろうという、アジア馬鈴薯協会 (APA) の設立は1979年であるが、今回 (第4回) の韓国での会議は、日本でも多くの知人を持っている韓 博士 (Dr. Hahn Byong Hee) が会長であり、多くの日本人の参加があるものと期待していたが、9名と淋しかった。会議参加者は全部で約150名、そのうち、韓国以外 (外国人) の参加者は18カ国64名であった。会場のホテル (Yong Pyeong)、はソウルから225キロ、東海岸の江陵から20キロ山に入った標高およそ800mの大関嶺にあり、夏は涼しく、韓国夏作馬鈴薯の産地である。筆者は13年ぶりに大関嶺の自然と再会した。印象は、高原の夏秋野菜栽培はあいかわらずであるが、観光施設があらこちにでき、かつての田舎が見違えるほど整然とした町に変わっており驚いた。

7月5～7日の会議は3つのパートに分けられていた。1つはキーノートスピーカーによる講演と討議、2つ目は4つのセッションに分けられた一般講演、それにエキスカージョンである。

5日の朝から開会式があり、韓 会長の挨拶に始まり、農村民政部長、高嶺地試験場長の歓迎の挨拶等の後、キーノートスピーカーによる講演が続いた。遺伝、育種部門は、Dr. P. F. Schmiediche (CIP) により、21世紀に向けての馬鈴薯育種と題して話された。その概要は20世紀の馬鈴しょ、特に最近話題のバイオテクノロジーによる育種の進展にふれ、21世紀には新しいこれらの方法によって、薬を用いない病虫害抵抗性の品種の育成が望まれる、と述べた。次に、筆者は種子生産部門で、西ジャワ州における

種馬鈴薯の増殖体系と生産技術の開発と題して、インドネシアではじめて行われる種子増殖体系と増殖関連技術の開発状況を述べた。3番目は栽培、生産部門で、Dr. E. T. Rasco (SAPPRAD) による新しい馬鈴しょ生産地における生産技術と題して、SAPPRAD (東南アジア馬鈴しょ研究、開発計画) のネットワークを通じて熱帯の低地や中間高地における栽培状況を述べた。最後に、保護部門で、Dr. L. Turkensteen (作物保護研究所、オランダ) により、減農薬による病虫害防除と題して講演があった。重要病虫害の疫病、夏疫病、黒あざ病、センチュウ、ジャガイモガ、コロラドハムシなどの防除は、抵抗性とか有機物や耕種的方法等化学物質によらない方法が期待されると述べた。5日の午後は以上の講演に対する討論が行われ、続いて、一般講演がおこなわれた。

一般講演は6日にもおこなわれ、部門別では、種子生産が8題、保護及び栽培でそれぞれ23題づつ、育種部門で17題の発表があった。全体的な印象では細胞レベル (DNA) のものから簡単な栽培試験まで変化に富んだ発表があり、特に開催国である韓国においては、若い人の積極的な発表が目をつけた。

7日は午前中は総合討論とアジア馬鈴薯協会の総会とが行われ午後は見学で、高嶺地試験場の種子増殖と品種の育成状況、種子畑、加工工場における貯蔵方法、マイクロチューバー (試験管内で作った) の畑での栽培状況を見た。夜は韓会長主催のパーティーが韓国式で行われ、伝統的な料理に舌鼓をうち、アルコールがまわり始めると共に、アジア各国の歌声がカラオケに乗り、いつしかアジアは1つになり、楽しい中にも次回のタイでの再会を願っておひらきとなった。(田中 智)